

エディトリアル

横須賀市立うわまち病院小児医療センター センター長 宮本朋幸

2021年12月号の「学校での緊急対応」に引き続き、養護教員や教育現場の職員が知っておくべきことを各執筆者に書いていただいた。また、地域を守る医師がそのような教育施設の職員に対して指導する際の参考となるようにとも考え企画し、健診後の対応や日常的に医療を必要とする持病がある児童・生徒に対してどのように考え、実践したらよいかを述べていただいた。

腎・泌尿器疾患を大友義之先生にお願いした。血尿・蛋白尿の対応を地域で2次検診に関わる医師にも参考となる詳しい解説をしていただいた。そして学校ではなかなか気づきにくい、宿泊学習などで突如として問題となる夜尿に関しても詳しく解説していただいている。ADHDなどの疾患が併存する場合もあり、学校での生活の様子を家庭と共有することの必要性を感じる。また、すでに治療に入っている小児に対するの注意点も書かれているので参考にさせていただけると思う。

次に循環器系疾患について北川篤史先生と平田陽一郎先生にお願いした。学校健診で発見される疾患や学校管理下で突然死を起こしうる疾患、学校生活管理指導表の使い方などをお願いした。日本が世界に先駆けて実施して成果を上げている心臓検診を有効に利用して、疾患を発見し管理につなげるという今のシステムを解説していただいている。さらに学校管理下突然死ゼロに向けた熱いメッセージをいただいた。小児循環器病学の先達の先生方への尊敬と次代を担う医師たちの心意気を感じられる。

志賀健太郎先生には糖尿病について執筆をお願いした。1型糖尿病は、インスリン自己注射を行う疾患であるため、日本の有病率の低さもあり学校現場で戸惑うことの多い疾患である。経験のある学校関係者も少ないのが実情である。子どもたちの可能性を狭めないような配慮をして疾患を管理するということを提言していただいている。また、近年小児でも発症が多いことが分かってきた2型糖尿病については、日常生活において学校の果たす役割の大きさが述べられている。学校での指導が継続的な受診や本人の自覚につながった例が紹介されており、家庭と学校で協力し合って疾患を管理していく重要性が説かれている。

学校生活で特に問題の多いアレルギーは高増哲也先生にお願いした。アトピー性皮膚炎に関してはスキンケアが重要であることは言うまでもなく、学校で気を付けるべき事項について解説されている。また、食物アレルギーに関しては、「検査の数値によって対応を決めることはなく、生活管理指導表に検査結果を添付する必要はない」と書かれているように血液検査を重視してしまいがちな学校関係者に注意を促している。また、アレルギーサマーキャンプについても紹介されているので参考にさせていただきたい。

最後は“てんかん”について角春賢先生にお願いした。学校で発作が起こると本人も周囲の子どもたちもショックであるし、学校での対応にも苦慮する疾患である。てんかんの定義と治療法の解説は疾患の理解に有益である。次に保護者が子どもを学校に入学させるときに心配になる事項を挙げ、それに対する学校側の対応法が解説されている。一つ一つが現場で実際に遭遇する問題点や質問であり、参考にさせていただきたい。

この特集の執筆依頼に際し特に記載していなかったのだが、どの論文も「子どもたちが学校でいかに楽しく、人生を豊かなものにするか」ということが主軸となって構成されている。小児医療は全ての子どもたちの未来が豊かであることを願って展開されており、教育現場もしかりである。医療・教育が一体となり、地域で子どもたちを守り育てることが求められる本誌の読者の方々に、本特集が一助となれば幸いである。